

結城賞 2020-9-25

結城賞は岡山大学医学部でその年になされた優れた研究にあたえられる賞で、現在、同医学部にあるいろいろな賞のなかで、もっとも歴史と伝統があります。この賞は、1939 (S. 14) 年に岡山医科大学を卒業され海軍軍医として活躍されていた結城貞昭氏が、1942年4月18日に戦死されたために（当時32歳、戦死後従六位海軍軍医少佐に昇進）、1943年にご尊父の日本画家結城素明氏（元芸術院会員、芸大名誉教授、1875-1957）が、医学の振興発展のために医学部に1万円を寄附された原資に基づいています。

当時の1万円は、現在どのくらいの価値があるのでしょうか。当時の米価、ビールの値段は、現在約1000倍です。また、コーヒー1杯は3000倍です。とすれば、当時の1万円は、現在少なくとも1000万円の価値はあると思います。大変高額のご寄附です。

貞昭氏は1939年3月に卒業後、生理学教室の副手となり、同年10月海軍中尉として任官しています。そして、1942年4月18日に太平洋ビスマルク諸島で戦死します。

当時の日本を概観してみると、1929年の世界経済大恐慌を受けて日本も大不況でした。そのために、国際条約を無視し、1932年、満州国を樹立し、満州の資源で日本経済の活性化を図りました。しかし、このことは、国際法無視の侵略であり、列強から強い反発がありました。また、もともと満州を所有していた中国の抗日運動が起きます。そのために、1937年、日中戦争が軍部の独断で宣戦布告なしに始められています。この戦争も、国際法無視だったので、日本は列強から経済封鎖など受け、ますます苦しくなります。この苦境を脱出するというので、「大東亜新秩序の建設」というスローガンで1941年、米国との戦争（当時、大東亜戦争と言われた）を始めます。1939年に出征した貞昭氏は、日中戦争に続き大東亜戦争に関わった訳です。

1942年6月27日に行われた貞昭氏の告別式は、六百余名の会葬者で盛大でした。彼の性格は上品で、その上、快活で茶目っ気もあった人気者で友人も多く、また、尊父素明氏が有名画家でもあったせいでしょう。その上、日本の社会は戦争の悲惨さをまだそれほど感じていなかった時期でした。もっとも、4月の貞昭氏の死後、6月5-7日のミッドウェイ海戦で日本海軍は大敗し、戦況はアメリカ優勢となっていました。しかし、6月10日の日本の大本営発表では、日本側は空母1隻沈没（実際は4隻）、1隻大破の被害、一方、米国の空母2隻沈没（実際は1隻）と報道され、国民には「日本側がやや有利」という印象を与えていました。昔も今も政治には嘘と誤魔化しがあり、国民は蔑ろにされているようです。

この告別式で、平田昇横須賀鎮守府司令官海軍中将は、「死をもって国につくすことは、軍人として満足なことであろう」と弔辞で述べています。また、戦争中、貞昭氏は中学時代の友人に送った手紙の中で、「東洋の平和のために、大君の御前に倒る」、「軍人と名のつくものは靖国行きを覚悟しなければならない」などと書いています。

以上のような考えは、明治15年につくられた「軍人勅諭」に基づくものかもしれませんが、日清戦争、日露戦争、満州事変、日中戦争、大東亜戦争と、戦争を重ねるごとに、国のために命を投げ出すという観念がエスカレートして国民に深く浸透していったように思います。どうしてでしょうか。私は軍国主義の教育だと思います。戦争という相手も自分も傷つく理不尽なことに、ただ自国のために盲目的に命をかける人間を育ててしまう危険性が教育にはありそうです。

優秀な研究で結城賞を受賞された方々が、戦争の悲惨さや教育の影響ということも考えていただければ嬉しいのですが。

(本稿を書くにあたり、結城素明氏の編集された、私書版「海軍軍医少佐結城貞昭、昭和18年出版」を参考にさせていただきました。)